ケース 2－2（牧師版）

あなたは 44 歳になる牧師である。

おいしい海の幸と住む人々の穏やか気質で知られる、とある中規模の地方都市の郊外にある A 福音教会で伝道者になったのは 25 歳のときだった。それから 19 年が経った今、あなたは漁港近くの駐車場で海を見ながら自分の人生について考えていた。「私の人生は、本当にこれで良かったのだろうか？」自分が牧師という道を選んだことを後悔したことはないが、これ以上牧師を続けていけるかどうか、今のあなたは完全に自信を失っていた。

クリスチャンホームで育ち、母のお腹にいたころから賛美歌を聴いていて、15 歳のときに洗礼を受けた。特にやりたいことも見つからなかったので、数学が苦手だったあなたはとりあえず地元の国立大学の文学部に進んだ。就職活動が始まった大学 3 年生のとき、かなり悩んだが、今までにないほど真剣に祈った末に、マルコによる福音書 1 章 17 節の「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」というイエスの御言葉が示された。KGK（キリスト者学生会）の活動の中心的な役割を担っていたあなたは、その翌週、東京で行われた全国青年宣教大会という若者のクリスチャンの集まりに、地方の代表者として参加した。集会のなかで「献身の召し」に応答する促しが講師から語られたとき、あなたの意志とは関係がないかのように自然と足が動き、講壇の前に進み出ていた。今から思えばあれは聖霊の促しだったのだと思う。所属教会の牧師に相談したところ「あなたは牧師に向いているかもしれない。真剣に祈ってみると良い。知り合いが教えている神学校が東京にあるので、そこを受けてみるのも良いかもしれない。」という言葉をもらった。タイミングが良いのか悪いのか分からないが、その次の日、地元の優良企業から内定の手紙が届いた。一瞬うろたえたものの、神からの召しを確信していたあなたは内定を断り、神学校に行き牧師になる道を選んだ。

クリスチャンホームとはいえ、厳しい時勢であることもあり、「牧師で食っていけるのか？」と両親は当初理解してくれなかったし、祖父母や親戚はあからさまに「もったいない。普通に就職すれば安泰なのに。」と言った。あなたは自分の選択を暗に否定されたように感じ、周囲の無理解に悲しくなったが、「でも、これは自分の人生だ。神に従うということは、こういうことなのだ」と、半ば殉教者にも似た気持ちで神学校に入学した。両親は学費の一部を支払ってくれ、残りをまかなうため奨学金も借りたが、生活費と教材費は自分で稼ぐ必要があり、3 年間の神学校生活は「苦学生」というにふさわしく、起きている間はギリシャ語、ヘブル語、組織神学と格闘しているか掛け持ちのバイトで肉体を酷使しているかのいずれかで、寮では泥のように寝た以外の記憶はない。

神学校時代の実習教会の牧師の長女があなたの今の妻である。「義理の父」となった A 福音教会の主任牧師からバトンを受け継ぎ主任牧師となったのは 3 年前、あなたが 41 歳、主任牧師が 65 歳のときだった。現在 68 歳になる義理の父は現在も「協力牧師」として留まり、役員にも名を連ねている。A 福音教会は約 40 年前に義理の父によって開拓された。日本全体の経済成長の波に乗るようにして、70 年代後半から 80 年代に堅調な成長を遂げ、教勢を伸ばした。家庭集会で始まった小さな群れは、80 年代に会堂を建て、メンバーの増加とともに増改築を繰り返し、現在は 100 名を収容する会堂を持つ、市内では最も大きなプロテスタント教会として知られるまでになった。

3 年前に主任牧師になり、教会の舵取りをまかされるようになった当初は様々なやりたいことがあった。現在礼拝出席者 80 名の平均年齢が 60 歳前後という教会の若返り、子ども伝道への注力、若者への働きかけ、硬直化した組織の改革、子育て世代の信仰継承や職業生活のサポート、地域社会への NPO などを通した奉仕活動などである。これらの構想の多くは、5 年前に買って以来ボロボロになるまで読み込んだ「ケープタウン決意表明」がヒントになっていた。しかし、実際に主任牧師になってみたときに見える風景は、想像しているのとは全く違った。まず、背負うものの大きさに改めて圧倒された。A 福音教会は先代のあなたの義理の父がその人生をかけて開拓した共同体だった。それを担ってきたのは義理の父と同年代の「団塊の世代」の信仰の先輩たちであり、役員の多くもこの世代で占められていた。今まで副牧師として牧会に加わり、役員のひとりとして役員会に出席していたのと、主任牧師として教会全体を導いていくのは大違いだった。

眠れなくなったのは今年のはじめごろからだった。去年の秋に臨時総会が持たれた。そこであなたは信徒の多くが抱えているあなたへの不満や批判があふれ出すのをただただ見ているしかなかった。まるで火山の噴火のようだった。その不満の土石流はあなたの心の中を混乱に陥れ、抱いていた夢や希望、そして何よりも牧師として教会を導いていくという自信を粉砕した。臨時総会で噴出した不満の数々を、あなたはうまく思い出すことができない。年上の信徒たちから批判される自分の姿を「離人症」のように呆然と、どこか高いところから眺めているような感覚に覚え、信徒たちの声は水の中から聞く地上の会話のように遠くでくぐもって聞こえた。「先生のメッセージはまったく意味が分からない。」「なぜもっと精力的に伝道しないのか。」「先生が何をしたいのか私たちはまったく分からない。」「もっとリーダーシップを発揮してくれないと困る。」「先生の働き方は家族を優先してばかりでまるでサラリーマンのようだ。本当に献身した牧師なのか？牧師というのは私生活を献げて教会に仕えるものだと思っていたが、失望した。」「先生のメッセージ内容について、福音の理解があまりに進歩的すぎる。もっと聖書に忠実な王道のメッセージを語って欲しい。」

自分が主任牧師になってから 2 年間で、徐々にではあるが教勢が落ちていたのは事実だ。

礼拝出席者数は減り、受洗者は年に 1 人いれば御の字だ。教会の大多数を占める団塊世代が退職し所得が減っていくので当然教会の献金額は年々減っていく。自分と同じ働き盛り世代の 30 代、40 代は団塊世代の子どもたちを中心にクリスチャン二世であり、彼らはとても良く頑張っていると思う。同世代の彼らのことは信仰的にも尊敬しているし、自分のことを心でサポートしてくれているという信頼関係がある。しかし、右肩下がりの今の世の中において彼らの社会での役回りは過酷であり、給料はほとんど増えないのに責任と労働量だけは年々大きくなり、精神的にぎりぎりのところで踏みとどまっている。また、彼らの多くは共働きなので、男女に関わりなく「教会の活動」に割くことの出来る時間は限定されてくる。そんな彼らがほとんど教会のイベントや会合には参加できず、日曜日は家族のための唯一の休日として教会に顔を出さない週もあり、献金額も頼りないものであることを、いったい誰が責められるだろう。あなたはしかし、「この世代が神にあって生き生きと歩めなければ、教会の牧師をしている意味はない」という気概をもってこの数年、いやそれ以前から、この 10 年ほど駆け抜けてきた。

臨時総会での不満の噴出は、そんなあなたへの「不適格宣告」であり、教会の中心を担ってきた世代からの「戦力外通告」のようなものだった。臨時総会には同世代の若手も一部参加していたが、その大多数は 60 代以上だった。要するに、あなたが見ていたビジョンはすべて、ボリュームゾーンである団塊世代にとっては全く関心のないことであり、彼らは「あの 80 年代の教会成長よ、もう一度」という夢を抱いていたことに、いまさら気づいたのだった。あなたの描いている「未来の教会」のビジョンに心から賛同しているのは一部の同世代の「仲間達」だけであり、教会員の多くは「自分たちの方を向いて牧会してくれない」あなたに長い間不満を募らせてきたのだった。この「同床異夢」とも言える乖離に気づくのに 10 年以上を要した自分の鈍さをあなたは呪った。

この臨時総会を期に不眠症になったあなたは心療内科の睡眠外来にも通うようになった。通院のことはもちろん信徒には内密にした。自分で何とかこの状況を打破しようと、リーダーシップに関する本を読みあさった。力強いリーダーシップを発揮することが期待されていることは十二分すぎるほどに感じたので、これまでの「分散型リーダーシップ」とか「民主的で自発的な組織」といったアイディアはいったん留保し、典型的なトップダウン型のリーダーシップに舵を切ってみた。先代の牧師と同じ手法をしている自分に「何をやっているのだ、オレは」というツッコミを心で入れつつも、「教会が空中分解してしまう」という悪夢を振り払うためには、この線で突き進む以外にはないとそのときは思えた。「年間受洗者数●●人」といった大胆な数値目標をかかげ、什一献金を徹底するように信徒に働きかけ、「2030 年ビジョン」という新会堂建築構想を打ち上げた。クリスチャンのミュージシャンや伝道者を招いてのコンサートや伝道集会などもこの数年はまったくしてこなかったが、それらを再開するようになった。その結果、同世代の若い信徒を動員せざるを得ない状況に

なり、必然的に彼らに対して押しが強くなった。「教会を優先するように」という見えない圧力を与えてしまったこともあったかも知れない。「先生、最近焦りすぎていませんか？」と直接若い信徒に言われたこともあった。

あなたのその「極限に張り詰めた糸」が切れてしまったのは、先月、最も信頼していた同世代の信徒で、心の中では盟友だと思っていたB兄弟が、「他教会に移ることを考えている」と切り出したことだった。「先生に不満があるというわけではないのだけど、ちょっとこの教会から離れて自分たちの信仰を見つめ直したい。」と彼は言った。どんな不満があるのか、正直に言って欲しいと聞いても彼は多くを語ってくれなかった。「家庭の事情もあるので詳しいことは言えない。いつか分かっていただける時が来ますから、ご勘弁ください。」と繰り返すだけだ。B兄弟は仕事で忙しくなる以前は役員も引き受けてくれていたこともあり、現在も様々な先駆的な働きの要でもあった。B兄弟と家族の歩みこそが、自分が思い描く未来の教会として神から示されていた姿だと思っていた時期もあった。あなたは絶望した。義理の父は沈黙している。あなたの妻は「お父さんたちの世代のために牧会しているんじゃないんだから、あなたはあなたの信じる教会の姿を追求したらいい。」と言ってくれた。しかし、組織を維持していくのは理想論だけでは無理なのだ、と去年の臨時総会で突きつけられたと感じている今のあなたには、その言葉も響かなかった。

漁港の駐車場で、あなたは自分とダビデを重ねていた。

サウル王とその側近たちに王国を追放されたダビデは、自分のところに集まってきた「ごろつき」たちと一緒に共同体を形成した、という旧約聖書の記事が頭をちらついた。いっそのこと、自分と同じような教会像を描いている仲間達と、ハウスチャーチのような形で小さな群れを起こせたらどんなに楽しいだろう。もしかしたら40年前の義理の父はそんな気持ちだったのかもしれない。ただ、今の教会の信徒と一緒にというわけにはいかないので、そうなると全く知らない土地に行って、最初はアルバイトをしながらになるかな、そうなると教団からはセクトのレッテルを貼られるのかな、などと妄想だけが膨らむ。夕方になるとこの駐車場から来た道を引き返し、高齢の婦人が中心に集まる水曜日の祈祷会を導かねばならない。今はただ、身体が鉛のように重い。

設問１．この主人公の行動について、批判的に議論してください。
設問２．この主人公はこの後どう行動すべきなのか議論してください。